

分析基準を設ける

1言語全体での基準

様々な表現ジャンル、老若男女、職種などすべてを含めたとき、日本語としての基準が必要である。⇒表現全体基準

表現ジャンル別基準

論文、報告文、エッセイなど、様々な表現ジャンルがある。表現ジャンルがあるのは、表現構造、表現展開が異なるからである。これらのジャンルの基準がある。

職種別基準

職業によって、思考構造が変わる。同じ言語であるのにも関わらず職種で変わる。研究職、営業職、経営者など、考える範囲と対象、日常に接する人々によって、表現構造、思考構造が構成されていく。

読みやすい基準

多くの人に親しまれやすい表現構造がある。分かりやすいだけでなく、リズム、肯定・否定、断定・推量などの組み合わせなどにより変化する。

●これらの基準は、表現全体基準があって、全体基準と比較して現れる。基準を設けるには、多量の文章群があってターゲットが求められる。

●表現は、思考スタイルと生活スタイル、習得されている知識範囲に影響される。望まれる表現構造は論理的に求められる場合もある。仮説設定であり、仮説ができてから、多量の文章群との比較検証は必要である。